

「デジタルアーカイブ in 北海道・岐阜」の開催について

～遠隔会議システムを用いた研究会の課題～

井上 透・櫛 彩見

1. 概要

地域・コミュニティーアーカイブの振興、その過程での人材養成のための理論などについて、2018年2月8日（木）に北海道博物館、及び札幌学院大学を会場に「デジタルアーカイブ in 北海道・岐阜」として研修会&研究会を開催した。また、研究会はウェブ会議システム zoom を使い岐阜女子大学会場と同時開催し、常磐大学、東京大学情報学環、岐阜女子大学沖縄サテライト校とも接続し、多地点接続による研究会を開催した。主催は、デジタルアーカイブ学会人材養成部会、コミュニティーアーカイブ部会、日本教育情報学会デジタルアーカイブ研究会である。

プログラムは、午前中、北海道博物館見学を行い、午後に札幌学院大学 B201 教室に移動し、岐阜女子大学文化情報研究センターと接続し研究会を開催した。研究会を行うこととなる主会場は、札幌学院大学大学、岐阜女子大学文化情報研究センターであり、副会場として常磐大学、東京大学情報学環、岐阜女子大学沖縄サテライト校に接続し、研究会を視聴し質問できる環境とした。

参加者は、北海道博物館見学 13 名、研究会 34 名（札幌学院大学 14 名、岐阜女子大学文化情報研究センター 13 名、常磐大学 2 名、東京大学情報学環 3 名、岐阜女子大学沖縄サテライト校 2 名）であり、述べ参加者数 47 名となった。

2. プログラム

北海道博物館ツアー

- 9:20 集合（正面玄関入ったカフェ前）
- 9:30 博物館資料の DB 化の現状説明（30分）
- 10:00 アイヌ語アーカイブに関する講話（1時間）
- 11:00 収蔵庫の見学（1時間）
- 12:00 展示室見学{案内あり}（30分）
- 12:30～ 昼食・自由見学・移動

札幌学院大学と岐阜女子大学文化情報研究センターとリンクした研究会

- 15:00 開会あいさつ
- 15:05 基調講演
- 15:35 口頭発表
- 17:20 イベント案内
- 17:25 閉会

3. デジタルアーカイブ in 北海道・岐阜の報告

(1) 北海道博物館ツアー

近年、いくつかの博物館に導入されているミュージアム展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」の説明があった。解説コンテンツのアーカイブ化による提供に参加者は興味を持った。その後、博物館資料の DB 化の現状説明、アイヌ語アーカイブに関する講話があった。特に「許諾書」の事例説明などがあり、質問を集めた。終了後、学芸員の案内によるバックヤ-

ドツアー・収蔵庫の見学を行った。

(2) 札幌学院大学と岐阜女子大学文化情報研究センターをリンクした研究会

岐阜女子大学後藤忠彦学長の開会挨拶が岐阜会場からあり、北海道会場から皆川雅章先生（札幌学院大学副学長・教授）による基調講演「北海道のデジタルアーカイブについて」が行われた。その後、研究会に入り地域アーカイブ・コミュニティーアーカイブ関係として「東日本大震災アーカイブ宮城」の権利処理について、「地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための実践的研究」、「『沖縄おうらい』の印刷メディアとデジタルメディアの連携について」、「飛騨匠の技デジタルアーカイブ開発」の発表があった。

岐阜会場から「大学図書館司書に必要なデジタルアーカイブ教育の新しいカリキュラムの提案」発表があったのち、「企業におけるデジタルアーカイブ」、「デジタルアーカイブの対象メディアと開発プロセスの課題」が北海道会場よりあった。

4. 遠隔研究会実施の有効性と課題

ウェブ会議システム zoom は、常磐大学の塩先生のコントロールにより遠隔研究会に活用することができた。多地点接続、画質、プレゼン資料の解像度は実用に耐えられるものであり、今後、多くの学会イベントに活用できる可能性を持っている。経費についても今回は札幌学院大学と岐阜女子大学の協力により会場費が無料であり、遠隔会議システムの経費も無料であったことから、参加費無しで実施することができた。今後、ネット環境が許せば研究大会や定例研究会での活用も期待できる。

(1) 北海道会場での課題

主会場のうちの北海道会場では、最後の発表中にパワーポイントがフリーズしたが、これについては原因不明である。また発表中に、副会場の音声を拾う場合があった。他会場をミュートするなど、運用側のシステム習熟が必要となる。

(2) 岐阜会場での課題

もう一つの主会場である岐阜会場では、ノート PC 内蔵のカメラを使用したため、ノート PC の前に座らないと北海道会場に映像が行かない状況であった。質疑応答の際には、質問者が会場前方の発表者が座る席まで移動する必要があり、参加者には抵抗が感じられ、実際に岐阜会場では質疑応答が出ず、遠隔会議システムを研究会で用いる際の課題であると考えられる。

5. まとめ

研究会に遠隔会議システムを用いることで、多地点接続による遠隔研究会の開催が実現できた。少ない経費で実施できることから、ネット環境を整えることでデジタルアーカイブ学会研究大会や定例研究会への応用も期待できる。遠隔会議システムを今後行う際には、接続する副会場が増加すれば事前の打ち合わせや、操作訓練がさらに必要になると考えられる。今回は5会場接続であったが、どこまでシステム参加を広げるかは、実験を重ねることで研究し、可能な限り参加会場を増やせるように対応していきたい。